

二宮尊徳先生  
守本尊



不動尊

動カザレバ尊シ

不動尊

尊徳先生が初  
めて小田原侯  
の命を受けて  
茅野谷の栃木  
懸物井村の立  
直しに出向い  
た時不動の尊  
像を床の間に  
懸け此の不動  
心を以て一心  
不乱の復興  
に精進せられ  
たのでありま  
す  
(巻末記事参照)

二宮先生尊像建立記念六十六番  
かじりし百六十六番

學校日誌より

三月二十五日 午前八時修卒業式舉行  
四月一日 午前八時始業式 午後一時入學式舉行  
四月十三日 午後一時二宮尊徳先生除幕式舉行  
四月二十三日 午後一時全校生徒汐干狩ヲ行フ

金品寄贈者芳名

- 一 金五円也 證書授與式ニ
- 一 金八円五錢也 保護者會基本金へ
- 一 金五円也 學校備品費へ
- 一 八重櫻 参考品として
- シラセフゴンザレス殿
- 水留邦枝殿
- 堤玉章一殿
- 大川八重殿

右紙上を以て

申上げます

尋ニノツヅリカタ

長田耕吉

●二年生  
 ホクハニ年生ニオツタカカシ  
 ワケンナイニベノヤウヲシテ  
 學生ノチホシニオカウトオモ  
 チキマス。ソシテ一年生ノセウ  
 シテヤウウトオモヒマス。ソウシテ  
 オカアサノノイフコトヲキカケト  
 オモヒマス。ソシテヤウウトオモ  
 トオモヒマス。

マス。私ハ一年生ニオツタカカシ  
レシクテアマリマセンデシタ。

●二年生  
 私ハ二年生ニオツタカカシ  
 テアマリマセン。二年生ノホンヲモ  
 フテカヘリマス。トキ、カキホ  
 上デウケヒス。カ  
 ホウ本ケキヨ  
 トナイチオマシタ。  
 ソレデウチノゲンカノノマヘテ  
 トイツタラ、ハイトイヒマシタ。

●二年生  
 私ハ二年生ニオツタカカシ  
 ガアガリマシタ。  
 年生ノオホノニオツテ、マダニ  
 年生ニオツタカカシ、マダニ  
 イニ、オツタカカシ、マダニ

●オツカヒ  
 私ハオツカヒ、オバアキヤンノオツカ  
 ヒヲシテ、オチヤヲカニニ  
 シタ。サウシテ、オヨウオバサン  
 オマシタ。オチヤヲシテ、オ  
 トフクロニ、イツパイイレテ、クレマシ

奥山 涼子

奥山 敏子

オサカシテ ウチへカヘルトオバヤ  
キヤンガ  
「ワッパイクレタ オマへガイツタ  
カクダダ  
トイツチホナチ クダサイマシタ

杯一調

シホヒ  
ボクハキコフセンセイトシホヒ  
ガリニイキマシタ。サカシチボク  
ハアサリヲサガサウトオモラテ  
イツヤケケナイニサガシマシタ。ガ  
ヒトツモミツカリマセン。デシタノデ  
ミスノ中ニハイツチアソソデキ  
マシタ。  
ミスノ中ニイカノタマゴガ  
ミツカツタノデウレシクゴサイマシ  
タ。ソレカラウチへカヘリマシタ。

アブリウラ エビラトシユ  
ワタクシハキヨネンサカウラヘイキ

マシタ。ピョウイダニヘツキマシタ。ソレカラ  
フネンヲトホツチサカウラヘ  
シタ。ミヨネエキヤンノウチ  
ンデオバヤキヤンハツキマシタ。  
ガオバヤキヤンニオンブシチ  
デマツチキマシタ。  
ワタクシハオバヤキヤントウチ  
イキマシタ。  
オバヤキヤンウチニハキコ  
マス。サウシチヤマデカンシマ  
スツチヤマデアソビマシタ。  
カヘルトキニハカンシマヲモラ  
カヘリマシタ。  
ワタクシハオブリウラヘイキ  
グイスギデス。

尋三綴り方 (四月)

手紙

浅沼修行

ぼくは、かあちゃんの手紙をポストに入れ  
ておいて」といはれたので手紙を持って入れ  
に行きました。橋を渡って行くと、そのねえ  
が後からぼくをよびました。ぼくは、もど  
つて来て、「何だい」と聞くと、そのねえは、  
「かあちゃんはまだ書く所があるから  
まんでおいで」といったから来たのだよ  
いとおもひました。ぼくはまたもどるのにつら  
いとおもひました。けれど、かあちゃんが取  
ておいでといったといふか、いつか行  
ました。すると、かあちゃんはまだ書  
ました。もう書いてしまひました。それを  
持って行かうとする時、かあちゃんが、「い  
さまのポストに入れるよりも金四郎さんの  
前のポストの方が近くて早いぞやはいか」と  
いはれました。ぼくは頭をかきながら、金四

さんの前のポストに入れました。その時は  
ひきもどされたのがくやくしくいたま  
りました。かあちゃんがいったのだから、し  
方がないと思ひました。

内地へ行った実習者 渡辺三朝

此の間のかねで池田実習者はとうとう  
内地へ行ってしまひました。ぼくは、ま  
君が内地へ行くとは、少しも思つておま  
でした。そのあくる日、永田先生が「池田  
実習者はさのふのふかねで内地へ勉強し  
に行きました」とお話をされたので、ぼく  
はびつくりしました。内地へ行かない前  
は、おもしろいことをして、毎日のやうに  
おれんだのに、そのぼくの大事な実習者  
が行ってしまったので、ぼくはがっかりし  
てしまひました。けれども、その実習者のこ  
とが氣になつてはりません。さうして、  
「もう、実習者はかへつて来ないのかしら  
と考へると、なほがっかりしてしまひます。







生の像の事について色々とお話をし、式は終つた。僕は終るとすぐ石像の前に立つて見た。石像はまるで生きて居るやうに立派に出来て居る。僕等が修身で習つたやうにやうに薪を背負つて、わらじをはいて本を讀んで居る姿であつた。僕はそれを見た時僕もこの二宮尊徳先生のやうに後の人には敬はれるやうな人にならうと心から考へた。又村々の僕等の為にはこの石像を作つて下さつた大屋政太郎さんを有難いと思つた。

評 此薪を背負つたり 夜中に起きたりしたければ勉強する事が出来なかつた尊徳先生と父母の下で何不自由なく勉強する事が出来る自分の身分をくらべて考へて見ることも大切だ。

山の上まで行くと手前の半分は真白、次の三列は黄色で、其の向ふには紫と、フリジヤは今が

真盛リである。先づ白の花を上の方から順々に切つて行く。其の時せし子やんが波の音が聞える。カッ子やんが歌をうたひながら下の方から切り出した。白は切つたので、せし子やんに「紫が少いから紫を切らう」と私がいつた。黄も切つた。其の中が私は白が一番きれいだと思つた。私が歸る支度をし始めた時、カッ子やんは「弘子やん、切つておくれ」といつた。私は「さつき歌をうたつて居た時切らなかつたからだよ」といつたが、手傳つてやつた。歸りに下を見るとアマリスが一本大きなつぼみを持つて居た。フリジヤの香はむせるやうにはほつて居た。

評 この文はフリジヤの香のやうに生々とした氣分に満ちて居ます。○六年生全体として考へ方が深くなつて来たことは喜しく思ひます。しかし書きっぱなしで見直さない人があることは残念です。

二〇二

信一

私の家は東町にあり家の屋根はしやうつばで葺いてあります。家の前には疊屋があり隣りは大澤牛乳店と間瀬です。家は四疊半が四間に縁側があります。そして家の右の方にはこつた場所があります。庭は三所あり中庭の方には金魚や植木などがあります。横は物置になつてあります。その前の方に雞の小屋があります。小屋は二つあつて少し離れて立つてあります。雞小屋の前には免のある小屋があり又横には便所があります。その前が裏庭になつてあります。そこには木や唐辛子の木、パイヤの木や、植木など植えてあります。風呂場はこつた場所の前にあります。又そこには薪も積んであります。井戸は中庭のかこみの外にあつて家と間瀬との間にあります。家が今寝起きする人は皆で四人です。兄は林蔵さんの家へいつて寝て家や御飯を食へます。そして洲崎へ勤めてあります。私と母と祖母と父とが家に居る人です。又家には雞が六羽、免が一匹、目白が三羽あります。その中二匹は子です。今學校へ行つておるのは私一人です。祖母が身体が悪くて寝ておりました。此の頃はだん／＼良くなつて今は時々寝るだけで大依は起きておます。後は皆丈夫です。

笹口芳朗

沖山茂子

大村東町九九番地沖山茂子の家といへば大村には私の家一軒しかありません。家はあまり狭くはありません。八疊間に六疊間、四疊間に御勝手がついてあるだけです。周囲の家といへばかつた人の家と関谷さんの家だけですが裏は見上げ程の崖で表は下木が設けられて、其の向うは右側は関谷さんで左側はかつた人の家です。兄弟姉妹六人ですが一人兄が東京に行つて今は五人きりです。お母さんはいつても家庭内で私達を養育してお父さんは外に出て働いて其の費用で私達を學校に上げておます。私の家はほんとうに仕合せです。





く、漸歩して進み得る人間は、こうした些細と思はれる事柄をおろそかにせず、これによつて自らを訓練し、鍛練し、常に用意を怠らなかつた人達である。看護當番始末上級生として、下へき種々の業務、これこそは、學校が君等に與へた最もよき修養の道である。君等は眞剣に眞面目に全力をこめて、自己の職務を果し、授けられたる之等貴重修練の方法を最大限度までに活用せねばならぬ。孔子は「十有五にして學を志す」と云はれた。この言葉は簡單ではあるが如何に深い切實の意味を藏してゐることか。眞に學に志した時、學校に於ては勿論のこと、朝床を起して、夜寝に就くまで、日常の茶飯事といへども之を修養の資ならざるものはない。我々は全身を眼とし、耳とし、些細な事柄の中からも眞理を見出し、之に聴入り、之を胸に藏し、而して更に實行にまで及ぼし、行かねばならぬ。日本を背負つて立つ君等、君等の肩には重く責任がかつてゐる。ソツと進んで、徒に子供らしい感感にふけり、又つまらぬ争論にその日とくらしてゐる時ではないか。今こそ心を振起し、自己完成人格向上の道へと共に歩を進むべきである。

### 春の景色

名和田早苗

澄渡つた碧空を點綴して浮ぶ白雲。あたりは緑色した木々が春風にゆられてそよよよのんびりと又樂しげになびいてゐる。耳に響ゆるものは遠近からの人の聲、雑の聲。春をおかむ心持である。あたりを見れば薄紫の花には風がそよよと吹いてゐる。小鳥のこりりと一こも鳴いて、波形にわがふへ飛んでゐた。本當に春はい、氣持である。人は、心をとらなれさせる。

▲評 私達は兎角日帯の仕事に追はれて、私達を取巻いてゐるこの自然の美しさ、氣付かずに過ぎし勝である。これは誠に残念なことだと思ふ。コバルトに澄む空の色、微風によよ若葉の光、群青の海、眞紅の夕映、或は又梢に囀る小鳥の聲も、うららかに明け行く朝の爽がさ。たとへ一枝の花びら、一握の砂にも驚くべき自然の美はあます所なく表現せられてゐるのである。この麗しく、惠深い自然に對して、私達は何となく、心の眼を開き、心の耳を傾けようではないか。私達が苦心して綴方を學ぼうとする目的も、單に文と上手に間違なく綴り合はせると云ふことばかりに止るものではないと思ふ。忘れ勝る自然の美を心に取戻し、之を味ひ、これを楽しみ、日々の生活を豊かなものとし、更に一步を進めては、この恩寵あふる、大自然を讃仰し、常に感謝を捧げつゝ、人生を過さうとする、敬虔な態度を自から養成する為である。今ここに掲げた綴方には、春をおかむ心持である、と書いてあるが、この一句にこそ、何人でも考を要すべき深い意味がひそんでゐるのである。さうだ、このおかむ心持、これを私達はいつまでも忘れないであらう。そして両手を合せるかほりに、パンを握つてもつと力強くもつと生々と如實に自然の美を紙上に描出し、胸に満溢る、喜悅感謝の情を他の人にも傳へよう。

### 新芽の春を見て

佐藤平次郎

二時間目の鐘がチヤン／＼となつた。なうんで教室に入つた。だが氣が落つかない。のでなんの氣もなく、風防林を見た。窓の際には赤い新芽を出した小判草が僕をなぐさめるやうにふら／＼ゆれてゐる。その傍に黄緑色の木の葉も云へぬなめた。空には白雲がたなびいてゐる。先生が入つて來らぬので勉強を始めた。何でも始が大切だ。風防林の木々も皆新芽が丈夫だつたからあんな大本となつたのだ。僕も此の新芽を見て、

希望を持たり。

△評 この綴方には注意するべき二の重要な意味が込められてゐる。その一つは如何なる境況のそんども、常に自然と交し唯自然に任せて自らの心をなげき、はげませようとする清純な氣持。今一つは新芽の中に宿るはかりきれぬ神妙。作者の言葉は固くて不充分であるが、二の二の問題と吾々の前にとまらぬ、吾々の心を動かす、吾々の心を動かす、作者の意氣に答へよう。

櫻の木

私は或日花園へ迷ひ込んだ。  
幾萬の草花は火炎の様に燃えて、  
緑とその葉は風に舞ひまわつた。  
私は眩惑を感ずるが、歩むと行く  
ふと眼にとまつたものがある。  
それはちろほけな櫻の若木であつた。  
つかくとここの袖をぬぐうその袖を若葉をまじりこ  
どうしてその上に宿るのかは、鐘の  
花舞に舞ひまわつて来たもの。たゞ、  
何故この若木にも満たな櫻の若木が  
こんなにも多くあつたか、その理由は、  
それは若木が、理想論の、鈴の音、  
そして、その心に宿る希望と、そのもの。

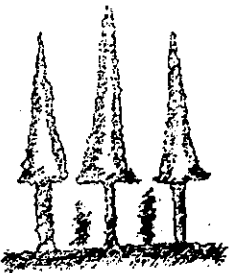
昭和十年度學事統計 (昭和十一年三月廿五日)

八四二 教日業校										
修業生	卒業生	原級留置	在籍合計	優等生	精勤生					
第一	五九	八	六六	一三	一八					
第二	五二	〇	五二	一	二					
第三	五二	〇	五二	一	二					
第四	五七	四	六一	一	一					
第五	五〇	一	五一	一	一					
第六	四九	一	五〇	一	一					
合計	二〇〇	一四	三三二	六八	七八					
高一	四六	〇	四六	四	一					
高二	一	〇	四	四	一					
合計	四六	〇	八八	八	二					
総計	三六	一四	二〇	七六	八					

學級編制表

(昭和七年四月)

學級	學年	児童數		受持教員
		男	女	
第一學級	尋常科第一學年	三三	三三	藤川敏夫
第二學級	尋常科第二學年	三五	三五	菊池久子
第三學級	尋常科第三學年	二五	二七	永田布祝
第四學級	尋常科第四學年	二四	三一	横山芳枝
第五學級	尋常科第五學年	三二	二四	横山文雄
第六學級	尋常科第六學年	二五	五〇	東 晃
第七學級	高等科第一學年	一九	二六	上野 茂
第八學級	高等科第二學年	二二	二二	東 達夫
計		二二三	二二二	



萌ゆる若草

(青年學校だより)

新學期開始の早々校庭に建立された。二宮翁の像仰ぎ見る度其の偉大なる  
 勤勞精神は國力充實の源泉として 萬古に輝くを覺ゆるものがある。  
 二宮尊徳先生それには 立派傳中日本の偉人であつた。 世界の偉人である。  
 彼一此の大偉人も元は一貧家の人であつた。 それが刻苦精勵の結果遂に彼の大成に至つた。  
 先生が下野物井村に赴任されて以床の間に彼の不動尊の像を懸け居られたので 當時の眞同  
 代官山内堂正があなたに不動尊をお信じたといふ事かと問ふた。 すると先生は、私が不動尊の  
 像をかいて置くのは此の村に荒れ果てて人気が居付かない。 私は鎮主の命を受けて来たので  
 此の村の立直りが出来れば此の村を勤くさいと決心してかまふ。 不動尊とは「動かされぬ  
 尊」と讀みます。不動尊の御利益の事は存じませんが、此の動かざるの大信念は一刻も忘れぬ  
 尊にまつた。 凡そ人は一つの仕事を専業としてやる。 尊の上には種々の苦勞が付いて来ます。  
 苦勞をやり抜いたら成れば出来ぬ。 不動尊は尊には大火焔を身にかけてピクともせず、 福三  
 郎米の如く冷水に浸つて尚且つ泰然として動かさない。 そこに尊の所が有り、 それが尊の成るの  
 此高なるのであつた。 我等は朝な夕な先生の像を拝すると共に此の先生の大神聖を取つて以て  
 尊にまつて御め勵み 寄贈者大屋さんの尊志に謝ればなれませぬ。

動かすな 他人が何と云ふとも、とうあるつと、  
 動かされるな 正義に立脚して、最も正しく認識し、大信念を持つ

一、今度大村青森學校女子部專任指導員片岡禮子先生が着任  
 一、四月十五日現在在籍生徒數左如シ

計	女	男	年	合
一三	一	五	一	本
三九	九	三〇	二	科
一四	一	一四	三	計
一一	一	一一	四	研
一一	二	一〇	六	究
九	七	二	一	科
二一	一七	四	二	計
三〇	二四	六	六	專
六	六	一	一	修
一六	一	一	一	科
四	五	二	二	合
				計

一、昭和十二年度入學者本科  
 男子 鈴木芳雄 外年七名  
 女子 大友たつ子 外十三名  
 專修科 川崎たつ子

第百六十六号  
 昭和十二年四月  
 大村青森學校女子部編輯部